

暖地における春作産種馬鈴薯の夏季高温時の輸送について
第 2 報 輸送に関する参考試験

相川 英雄*・高岸 欽 七*

AIKAWA, H. & TAKAKISHI, K. On the Transportation of Spring Crop Seed Potatoes during Summer Season in the Warmer District of Japan.
Part II. Reference Trials to the Transporting

1. はしがき この試験成績の一部は本誌に第 1 報を
発表して、暖地における春作産種馬鈴薯の夏季高温
時の輸送に関し、輸送期及び梱包の種類につき報告し
たのであるが、更に輸送資料の貯蔵中の腐敗及び減

耗・梱包の種類と薯温の推移について調査を行つたの
で、第 1 報の成績と併せ検討して参考に供したい。

2. 試験成績概要 a) 貯蔵中の腐敗及び減耗に
ついて

第 1 表 貯 蔵 中 の 減 耗 指 数 (1953)

調査期日	7月6日	7月16日	7月26日	8月5日	8月15日	8月25日	9月2日
累計指数	0%	2.9%	4.2%	5.4%	6.5%	7.6%	7.9%
増加指数	0	2.9	1.3	1.2	1.1	1.1	0.3

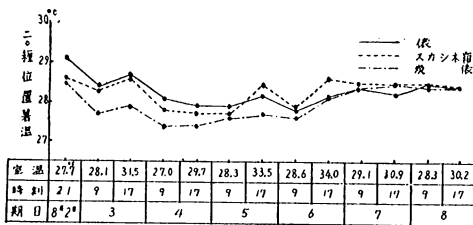
註) 7月3日収穫 7月6日試験区設定

春作産薯の秋作植付期までの貯蔵中の水分の減耗は
7.9%に達しているが、収穫後の 2~3 週間に最も激
しくその後は比較的安定する(第 1 表参照)。

また第 1 報の試験に供用した薯について行つた貯蔵
試験の結果では、7月 20 日までに 1.3% が腐敗し、7
月 20 日以降秋作植付期までの腐敗は 0.6% にすぎな
い。従つて長期の輸送には減耗の激しい時期を経過し
た 8 月以降になると長期の輸送に耐えるのではないかと
考察される。

b) 梱包の種類と薯温の推移について

第 1 図 梱包の種類と薯温の推移



本試験は梱包の種類による梱包内薯温の推移を明ら
かにするために行つた試験の概要である。

即ち、梱包当初の依内の薯温は、スチンボ箱及び炭
依よりもやや高温であるが、数日を経過すると依材料
による絶縁効果が大きく支配して薯温の変化は最も少
くなる。また 20cm 深度及び 10cm 深度では梱包当初
は 10cm 深度の薯温が低いけれども、時日を経過する
に従い、外温の影響を受け易い 10cm 深度が却つて高
い薯温を示すようである。しかし乍ら梱包の通気性によ
つてかなりの差を生じ、通気がよくない依では余り
顕著でない。

3. 摘要 春作産種馬鈴薯の夏季高温時の輸送に
は、収穫後の経過日数を増すことによつて輸送の安全
性を増大して、8 月以降では輸送による実質的障害は
極めて軽微である。また梱包の種類と薯温の推移から
考察して、通気がよくない依は、貨車内の高温を長く
持続して、着荷後に腐敗を生じ易いように推察される
ので、輸送の実際問題としては諸種の観点から、スチ
ンボ箱が春作産種薯の輸送に最も適切な梱包法の方
である。

*長崎県農業試験場愛野試験地